4-2　インシデント

2008 年度は、甲陽線において開扉状態で列車を走行させるインシデント（鉄道運転事故が発生するおそれがあると認められる事態）が発生いたしました。詳細は下記をご参照願います。なお、過去のインシデントを含み、再発防止策を実施済みです。

（件）

分類＼年度	2004	2005	2006	2007	2008
インシデント	1	2	0	0	1

甲陽線扉扱いインシデント

①発生日時・場所

2009 年 1 月 17 日（土）11 時 40 分・11 時 43 分　甲陽線　苦楽園口駅・甲陽園駅

②関係列車・車両（下線の車両で発生）

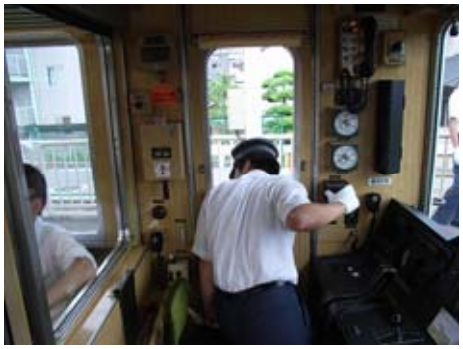
・第 11057 列車（普通　夙川駅発　甲陽園駅行）
・C#6022×3（C#6022･C#6587･C#6122）

③発生状況

運転士は、苦楽園口駅において、運転台から後方（写真上）を監視し、お客様の乗降がすんだことを確認して、扉を閉める操作を行いました〔実際には扉は閉まっていませんでした〕。

その時、ＡＴＳ（自動列車停止装置）ブレーキが動作したことを知らせるブザーが鳴動しましたが、運転士が運転台の各機器を点検している間にブザーは自動的に鳴り止みました。

その後、運転士は列車を出発させようと起動操作を行いましたが、扉が閉まっていないと起動しないシステムになっているため起動しませんでした。しかし、運転士は既に扉を閉めたものと思い込んでいたため、扉を開閉する電気回路に異常があると判断し、コントロールリレー切換スイッチ（扉が閉まらない故障等が発生した時に、緊急的に使用する回路に切替えるためのスイッチ）を操作し、列車を出発させました。



その結果、苦楽園口駅出発後、戸閉保安装置（速度 5km/h 以上で扉を強制的に閉める装置）が機能するまでと、機能が解除される甲陽園駅に到着する直前の数秒間、開扉状態で列車を走行させました。

④影響（遅延・負傷者）

なし

⑤原因

運転士が苦楽園口駅出発時、扉が開いている状態であるにもかかわらず、扉を閉めたものと錯覚し、異常時の取り扱い（戸閉回路の切換操作）を行ってしまったため。

⑥再発防止策

・規程(コントロールリレー切換スイッチの操作等)や標準作業の背景についての教育を実施
・執務状況の実態点検に基づく厳正な指導を実施
・異常事態発生時における運転指令に対する速報の重要性についての指導を実施